

## 小規模の大学における学生支援の試み（3）

－奈良産業大学学生相談室の活動（平成23年度）から－

菅 徹  
Toru Kan

### はじめに

学生支援センターが開設されて二年が経過した。平成23年度は、学生支援センターにとって画期的な年となった。

まず、第一にそれまでの5号館一階から2号館二階に新設、移転されたのである。スペースはそれまでの四倍となった。事務職員の執務スペース（窓口業務を含む）、学生の休憩スペース、保健室、三つの個別面接室、会議室、学生支援センター長室である。同じフロアには、学務課、就職課、国際交流センター等が配置されており、学生の動線に合わせた機能的な作りになっている。

第二には、学生支援センターの休憩スペースで学習支援のためのリメディアル教育が実施される運びとなったことである。第三には、学生相談の推進活動としての教職員向け学生相談研修会が定期的に実施された。このことによって、教職員の学生相談への関心が、より一層向けられたと思われる。特に第二、第三については、詳述していく。はじめに、個別の相談活動の内容を示す。

### 1. 平成23年度の学生相談活動概要

#### 1.1 個別の学生相談

##### 1.1.1 学生相談実施学生の「実人数」「延べ面接回数」（2011.4～2012.3）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
①	3	3	3	4	1		4	2	2	2			24
②	1												1
③	3												3
④	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	15
⑤				4	1								5
⑥	2	3											5
⑦	1												1
⑧		1				1							2
⑨		1											1
⑩						1							1
⑪			1										1
⑫					1								1
⑬			1	1			2	2			1		7
⑭				1				2	1	2			6
⑮			1	3	2		1	2	1	1	2		13
⑯		1		1									2
⑰	2	1						1				1	5
⑱	1	1	2	2			2	2			1		11
⑲	1												1
⑳		2					1						3
合計	16	15	10	17	6	3	11	12	5	6	5	2	108
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
保護者	0	1	0	1	3	4	3	0	0	0	3	0	15
教職員	3	4	3	5	2	3	2	2	0	2	4	5	35

表1-1 月別面接延べ人数及び面接回数

### 1.1.2 相談内容の内訳（学修、心理・適応など）

本学では、学生支援センター開設にあたり、右図のような学生支援の方針を定めている。

表1-2 相談内容の内訳

	勉強・進路	心理・適応	その他	
実数	4	12	4	20
延べ	5	89	14	108

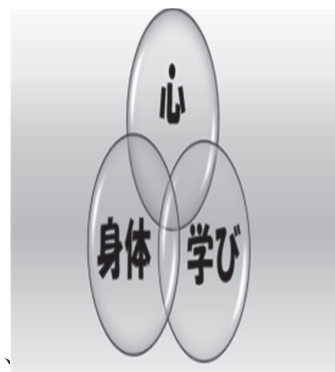


図1-1 学生支援方針

a) 「心」の問題、b) 「学び」の問題、c) 「身体」の問題が三位一体となって、学生支援の実が上がると思っている。そこで平成23年度の実績を示す。

### 1.1.3 学生支援方針への取り組み

#### a) 「心」の問題

表1-1は学生・保護者への個別相談件数・教職員に対するコンサルテーションの実数である。まず、学生への個別面接について概略を説明する。表の左縦軸①～⑫は筆者による個別面接の人数である。この中で、④⑨⑩⑬⑮⑯は特別な支援を要する学生（1名は卒業生）である。しかし、ここにあがっている20名は「相談内容の内訳」にあるような明確な区分ができない。学年の推移によって流動し、複合的な問題へと発展していく可能性がある。学生個々人も成長・変化しているのである。とりわけ三、四年次は、就職問題に起因する支援が必要になってくる。今後は、個人別・縦断的に成長・変化の様子を捉えることで、卒業までの支援効果を検討が求められる。

#### b) 「学び」の問題

学生支援センターでは、前年度、教職員の皆様に訴えた結果、平成23年度になって1・2年の学生を中心に「自主勉強会」を開設することができた。短期的な目標として、前後期の単位を取得することを目指している。単位が取れさえすれば、それでいいと考えている学生がいると思われる。もしそうならば、次の段階としては就職支援に繋げていく方策を考えなければならない。これは、「大学における学生相談体制の充実方策について」<sup>(1)</sup>（独立行政法人日本学生支援機構，2007）で述べられている、「学生生活サイクル」を三つのステージで説明していることと対応している。

本来、「学生支援」と言った場合は、発達障害や心理的な問題を抱えている学生だけを対象としたものではなく、全学生を対象とするものである。本学も、その流れに入ってきたと思われる。しかし、未だ全学的な取り組みとはなっていない。本学の学生支援センターの開設方針では、「心」・「学び」・「身体」を全学的な対応によってサポートしていくという、「ユニバーサルデザイン」の考え方は示されている。早急に実効性のある横の連携、すなわち「チーム支援」を実現していくことが今後の課題である。

#### c) 「身体」の問題

全学生の健康管理を担う役割としての保健室がある。ここで行われている学生支援は「心」と「学び」のバランスを図りながら、学生個人において、より高い目標を実現させるためのサポートを行う場である。その意味で、傷病はもとより、「心」の面でも、カウンセラー（以後、Co:とする）との連絡を密にして対応している。今後もしっかりと協力していきたい。

## ２．障害者への教育的支援の動向

### （１）「サラマンカ宣言」（１９９４）

インクルーシブ（Inclusive）教育（「障害の有無にかかわらず万人のための学校」）は、重度の障害児を含むすべての児童・生徒に対して、社会の完全な一員として実り多い生活を準備するために、近隣にある学校の年齢相当の学級において、必要な補助具と支援サービスとともに、効果的な教育サービスを受ける公正な機会を用意することである。この宣言以降、日本の初等中等教育の現場では、“特殊教育”から“特別支援教育”への移行が始まった。

### （２）「発達障害者支援法」（２００５）成立

第八条（教育）２ 大学及び高等専門学校は、発達障害者の障がいの状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする。高等教育である大学において、初等中等教育と同じように教育上の配慮を求めている。

### （３）「教育基本法」（２００６）改正

第四条 ２ 国及び地方公共団体は、障害（新設）のある者が、その障害の状態に応じ、十分な教育を受けられるよう、教育上必要な支援を講じなければならない。障害者に対する教育的配慮の保障を謳っている。

### （４）国際連合「障害者権利条約」（２００６）採択

#### 第二十四条 教育

- １ 締約国は、教育についての障害者の権利を認める。締約国は、この権利を差別なしに、かつ、機会の均等を基礎として実現するため、次のことを目的とするあらゆる段階における障害者を包容する教育制度及び生涯学習を確保する。
  - (a) 人間の潜在能力並びに尊厳及び自己の価値についての意識を十分に発達させ、並びに人権、基本的自由及び人間の多様性の尊重を強化すること。
  - (b) 障害者が、その人格、才能及び創造力並びに精神的及び身体的な能力をその可能な最大限度まで発達させること。
  - (c) 障害者が自由な社会に効果的に参加することを可能とすること。
- ２ 締約国は、１の権利の実現に当たり、次のことを確保する。
  - (a) 障害者が障害を理由として教育制度一般から排除されないこと及び障害のある児童が障害を理由として無償のかつ義務的な初等教育から又は中等教育から排除されないこと。
  - (b) 障害者が、他の者と平等に、自己の生活する地域社会において、包容され、質が高く、かつ、無償の初等教育の機会及び中等教育の機会を与えられること。
  - (c) 個人に必要とされる合理的配慮が提供されること。
  - (d) 障害者が、その効果的な教育を容易にするために必要な支援を教育制度一般の下で受けること。
  - (e) 学問的及び社会的な発達を最大にする環境において、完全な包容という目標に合致する効果的で個別化された支援措置がとられることを確保すること。
- ３ 締約国は、障害者が地域社会の構成員として教育に完全かつ平等に参加することを容易にするため、障害者が生活する上での技能及び社会的な発達のための技能を習得することを可能とする。このため、締約国は、次のことを含む適当な措置をとる。
  - (a) 点字、代替的な文字、意思疎通の補助的及び代替的な形態、手段及び様式並びに適応及び移動のための技能の習得並びに障害者相互による支援及び助言を容易にすること。
  - (b) 手話の習得及び聴覚障害者の社会の言語的な同一性の促進を容易にすること。
  - (c) 視覚障害若しくは聴覚障害又はこれらの重複障害のある者（特に児童）の教育が、その個人にとって最も適当な言語並びに意思疎通の形態及び手段で、かつ、学問的及び社会的な発達を最大にする環境において行われることを確保すること。
- ４ 締約国は、１の権利の実現の確保を助長することを目的として、手話又は点字について能力を有する教員（障害のある教員を含む。）を雇用し、並びに教育のすべての段階に従事する専門家及び職員に対する研修を行うための適当な措置をとる。この研修には、障害についての意識の向上を組み入れ、また、適当な意思疎通の補助的及び代替的な形態、手段及び様式の使用並びに障害者を支援するための教育技法及び教材の使用を組み入れるものとする。
- ５ 締約国は、障害者が、差別なしに、かつ、他の者と平等に高等教育一般、職業訓練、成人教育及び生涯学習の機会を与えられることを確保する。このため、締約国は、合理的配慮が障害者に提供されることを確保する。

日本は、上記「障害者権利条約」に２００７年に署名した。現在、批准をめざし、国内法との整合性を確保するための検討が文部科学省を中心に行われている。この、第２４条を子細に読んでいくと、特に、４は１の権利の実現確保のために、「手話又は点字について能力を有する教員（障害のある教員を含む。）を雇用し、並びに教育のすべての段階に従事する専門家及び職員に対する研修を行うための適当な措置をとる。この研修には、障害についての意識の向上を組み入れ、また、適当な意思疎通の補助的及び代替的な形態、手段及び様式の使用並びに障害者を支援するための教育技法及び教材の使用を組み入れるものとする。」とある。初等中等教育諸学校では「発達障害者支援法」（２００５）により、すでに特別支援教育が実施されており、あと３年程で特別支援教育を受けた世代の生徒が大学に入学して来るのである。生徒・保護者は大学の選択肢として当然のごとく、大学側の対応を判断基準にするとと思われる。このため他大学においては、その準備に入っている。本学でも早急に態勢を整える必要がある。

### 3. 個別学生相談の具体的な取り組み

#### 3.1 「学生相談トリアージ」の作成と運用方法

##### 「学生相談トリアージ」レベル分類基準について

- 1) 学生相談活動を円滑に推進するための方策として、奈良産業大学の学生支援センターは「チーム援助」の観点から、「災害時救急医療全体システム」(トリアージ)を「学生援助トリアージ」として援用する。

※「災害時救急医療全体システム (トリアージ)」とは？

災害時の救命現場では、限られた医療スタッフや医薬品等の医療機能を最大に活用して、可能な傷病者の治療にあたる必要があります。傷病者のトリアージ (triage) とは、医療機能が制約される中で、一人でも多くの傷病者に対して最善の治療を行うため、その緊急度や傷度によって、治療や後方搬送の優先順位を決めることです。(厚生労働省の定義)

- 2) 当該関係者(教職員)と共に、「学生援助シート」を作成する。その際、トリアージレベルを決定する。
- 3) 筆者が招集する「学生援助会議(仮称)」に提案・協議し、具体的に当該学生を援助する。
- 4) 「学生援助会議(仮称)」の構成メンバー(学生支援センター長・同事務室長・カウンセラー(以後、Co:と表記する)・当該学生関係者の三分の二以上の出席者で会議が成立する)。

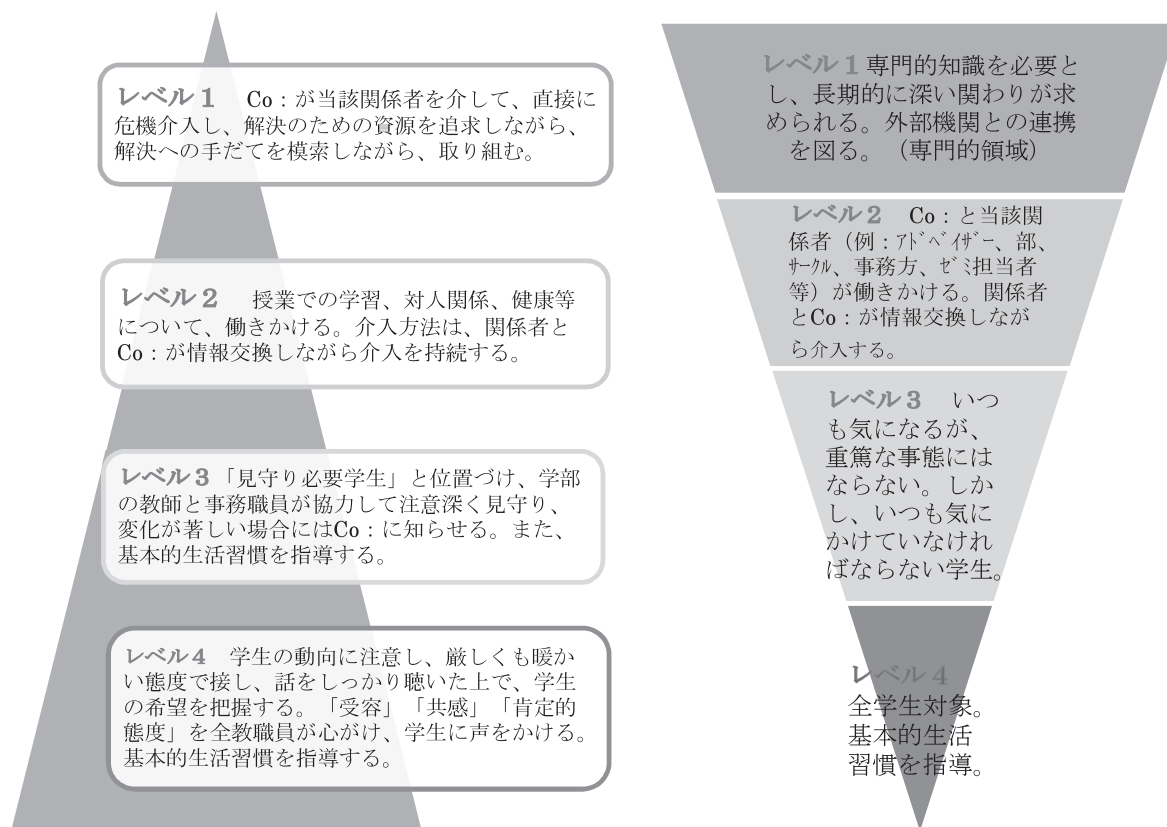


図 3-1 「学生支援トリアージ」

「レベル3・4の学生については、当該関係者(アドバイザー等)とCo: (カウンセラー)で「学生援助シート」を作成し、「学生相談対象学生の基礎資料とする。この時点では「学生の見守り」について情報学部で先行して実施された。各授業担当者が自分の授業を通じて、躓きのある学生を詳細に観察して、実態を把握してもらうことになる。(例: すぐに怒る、黒板のメモが遅い、対人コミュニケーションが、どのようにうまくいかないのか等、具

体的に！！）その上で、学生に適した具体的な支援策を考えていく。

ここで、「学生支援トライアージ」について、「レベル１」で説明する。左図の「レベル１ Co:が当該関係者を介して、直接に危機介入し、解決のための資源を追求しながら、解決への手だてを模索しながら、取り組む。」となっており、右図では、「レベル１ 専門的知識を必要とし、長期的に深い関わりが求められる。また、外部機関との連携を図る。（専門的領域）」となっている。すなわち、「レベル１」の段階の学生は、危機介入が必要な学生である。このような学生数は、全学生数から考えるならば、少数であろう。しかし、その学生は「重篤」であると考えられるので、対応するためには高度な「専門性」が求められる。「レベル１～４」を順次見ていくと、「重篤」が、人数的には減少していく。一方、「専門性」のレベルが次第に低くなり、対応する人的資源がCo: → アドバイザー → 一般教員 → 一般職員と、裾野は広がっていくのである。

### 3.2 「学生援助シート」の作成と運用方法について

左記 図３－１で示した「学生相談トライアージ」のレベル１～３の学生については、当該関係者（アドバイザー等）とCo:によって、以下に示す「学生援助シート」を作成した。「学生の見守り（レベル３）」以上を基礎資料とした。

援助 レベル		3・2・1		要 回 収		秘	
<b>学生援助シート</b>							
実施日:				記入者:			
次回予定: 定期試験後				記入日: 2011.			
出席者名:							
課題: 進路を控えての退行を防ぐ。物事のとらえ方の修正							
氏 名:		学籍番号:		ゼミ担当:			
情報のまとめ		学習面		心理・社会面		進路面	
		健康面					
		いいところ		<ul style="list-style-type: none"> <li>・何事もやれば出来る。</li> <li>・上級生と仲がいい。バイト先の先輩との関係も良い。</li> </ul>			
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・努力すれば、要領がよく、能力もある。</li> <li>・興味を持ったものには突進していく。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・人見知りする。・メンタル面で、兄・姉と同じ傾向がある。</li> <li>・物事に対する見方の偏りがあり、心が折れたら弱い。</li> <li>・物事に対する見方の偏りがあり、心が折れたら弱い。</li> <li>・現在まで、おおむね、面接の予約をしても2回に1回のわりで、キャンセルになる。特性があるのか？</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ちょっとしたことでも悩み、それが全体及ぼされる。</li> <li>・Co:に対しては、あまり接触したくない。</li> <li>・友人との意見の相違があり、11月中旬からゼミに出ない。</li> <li>・後期に就職につまずいた。</li> <li>・自分の理想と現実のギャップがある。</li> </ul>	
気になるところ		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校、授業がつまらないと言っている。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人暮らし(食事・栄養面)が心配、やせている。</li> <li>・スキーで怪我。</li> <li>・生活スタイルが崩れている。改善しなければ全てに影響しているのではないかな。</li> </ul>			
してみたこと		<ul style="list-style-type: none"> <li>・彼のアパートを訪問し、同じアパートに住んでいる学生と連れだって、食事に行った。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究室に彼のパソコンがあり自由につかえるようにしてある。</li> <li>・いつも、同じアパートに住んでいる学生を通して、情報を得ている。食事にも連れれて行く。( )</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・夕食を食べに連れて行った。</li> </ul>	
援助		この時点での目標と支援方針		<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業はアドバイスできる。</li> <li>・大学に、授業はともかくとして出てくること。単位にこだわらない。</li> <li>・一緒に食事をする。</li> </ul>			
支援案		支援の内容		<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究室に來させる。</li> <li>・ゼミとデータベースは可</li> <li>・後期の単位は“0”だと思われる。</li> <li>・ゼミ単位以外は難しい。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校は面白いと思ってもらえるようにする。</li> <li>・週1回の面接を続けられるようにする。</li> </ul>	
		誰が行うか		<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じアパートの学生とHさん。</li> <li>・情報…退学して専門学校へ、退学の意向あり。</li> <li>・卒業まで面接を持続。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・就職課のバックアップが期待できる。</li> </ul>	
		いつからいつまで行うか		<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月～2月(試験期間中)</li> </ul>			

表 3-1 「学生援助シート」



実際に筆者がCo:として、聞き取りを行った。一人分を「学生援助シート」に書き込む時間は約30分を要した。その結果、前ページのような援助の目標を明らかにすることができることになった。このあとの手順としては、定期的にまたは、必要に応じて、シートの更新を行うことである。アドバイザーからの申し出、あるいは、Co:が「援助会議」を開く必要を感じた際には、前回のシートを下敷きにして、どのような援助を行うのかを話し合う。そして、個人別ファイルとして、~~秘~~扱いで保管し、いつでも更新できるような態勢を立てようと考えていた。しかし、これまで見直しの機会に恵まれていない。今後の課題である。

#### 4. 本学の学生教育相談研修会

##### 4.1. 学生相談研修会（学生支援センター主催）

2011年度学生相談研修会 “『学生的心声をここで聴く』 実際的方法論”（講義・実習）（5/24）

① 来談者中心療法とは ② カウンセリングの基本技法「受容・共感・肯定的態度」 ③ ロールプレー実習

参加人数：教員（7）名 事務職員（9）名

##### 4.2. 学生相談定期研修会（学生支援センター主催） 毎月第2火曜日の2限目（会場：1号館 第3会議室）

第1回 学生相談の枠組み（「大学での相談活動について」）（講義）（6/14）

① 学生支援モデル ② 「学生支援シート」の運用について ③ 学生支援の在り方等

参加人数：教員（6）名 事務職員（3）名

第2回 事例研究（学生援助シートの活用）（講義・グループワーク）（7/12）

① 「学生支援シート」の実際 ② インシデント・プロセス法による事例研究

参加人数：教員（9）名 事務職員（8）名

第3回 発達障がい（アスペルガー症候群・発達障がいとは）（講義）（8/9）

参加人数：教員（7）名 事務職員（6）名

第4回 発達障がい（就労・学業・生活等具体的支援）（講義）（9/13）

① 発達（アンバランス）障がいとはどんな問題か？

参加人数：教員（6）名 事務職員（3）名

第5回 解決のための面接技法Ⅰ（講義）（10/11）

① “解決志向ブリーフセラピー”によるカウンセリング方法論

参加人数：教員（5）名 事務職員（5）名

第6回 解決のための面接技法Ⅱ（実習）（11/8）

① “解決志向ブリーフセラピー”によるカウンセリングとロールプレー実習、DVD視聴

参加人数：教員（6）名 事務職員（6）名

第7回 「アサーション（自己主張）のわーく（講義・実習）」（12/18）

① 「自己主張ロールプレイの講義」 ② 「自己主張ロールプレイ実習」

参加人数：教員（5）名 事務職員（5）名

第8回 「アサーション（自己主張）のわーく（実習）」（1/10）

① 「アサーション（自己主張）ロールプレイ実習」

参加人数：教員（5）名 事務職員（3）名

第9回 「学生が思わず本音を語る、学生相談を目指して」（講義）（2/21） 最終回

## ① 来談者中心療法とは ② カウンセリングの基本技法 ③ 解決志向アプローチ

参加人数：教員（9）名 事務職員（3）名

参加対象：全教職員、自由参加原則

以上のように、定期研修会を始めたため、教職員向けの研修会を10回行ったことになる。前年度まで、全教職員を参加対象とした研修会を年1,2回行ってきた。しかし、本年度は定期研修会を実施することにした。少しでも本学の相談活動に寄与することになるのであればという思いで、何とかやり遂げることができた。この原動力となったのは、研修会と歩調を合わせるように「学生相談だより」を発行（次章で詳述）して、毎回の研修内容を参加できなかった教職員に広報することが必要だと考えたからである。さらには、学生支援センターの活動が不断に続けられていることを内外に知らせることもなる。

定期研修会には、9回で88名、毎回10名ほどの参加者であった。三郷キャンパスの教職員は約百名であるので、約1割の参加ということである。この数字をどう評価するか、考える必要である。

## 4.3. 「学生相談だより」の発行

2011年5月7日に創刊号を発行した。年度内に毎月1回、主に教職員に対する定期研修会に出席された先生方の声を掲載し、筆者が疑問等に答えるというスタイルをとっている。以下にNo.9 12.9号を参照する。

11月研修会の報告 「解決のための面接技法Ⅱ」（ロールプレイング・DVD視聴）でした。今回は、皆様のコメントに驚きました。ここまで、深められたのか、との思いです。すでに中級講座での質問内容でした。

1. ロール・プレイングについて、むしろクライアント（CL）の役作りが難しく感じました。（CL）役を演じることで、学生の立場になってみるのが、ロール・プレイングの目的ではないかとすら感じられます。ある程度、モデルとなった学生を思い浮かべつつ、彼／彼女が、何を考えていたか、カウンセラー役の質問に答えることを通じて、洞察していく訓練のようでした。それはそうと、ビデオは実際のカウンセリングの様子なのでしょうか、それとも役者による演技なのでしょうか。あと、「子どもを引き取りたい」という前向きな（CL役？）でしたが、全く自暴自棄になってしまっている場合でも、カウンセラー（CO）役からの提案をはいけないのでしょうか。（教員・男性）
2. 質問者は、次にどういう質問をするのか悩ましい。具体的に、問題を詰めていくのか。それは、袋小路に入っていないか、など考えてしまいます。（教員・男性）
3. 仕事として、ある方向へ誘導していかなければならない場合、どうすればいいのでしょうか。カウンセリングとアドバイジングでは、手法に似ているが、目標が違うのでしょうか。（事務職員・男性）
4. ロール・プレイングはとっても楽しかったです。私達のグループはCLの方がやりやすかったという人ばかりでした。研修を受けたことを実践しなければと言う思いで、少し焦っていたように思います。相手の話をまず、「聞く」ということが大切だと感じました。（事務職員・女性）
5. これまでの研修で、ロールプレイにはかなり慣れてきましたが、「繰り返し」「言い換え」が出来たぐらいで、なかなか次の段階の「例外探し」や「スケーリング・クエスト」までは至りませんでした。ただ、対話の時間もも

- っとあれば、そこまで、たどり着けるかもしれない。3分ぐらいのロールプレイでは無理でした。（事務職員・男性）
6. ロールプレイをする場合は、（CL）役が難しく感じました。どのような人を演ずるか、もう少し、考える時間が欲しいと思いました。スケーリング・クエストなども試してみる機会を作ってくださると有難いです。（教員・男性）
  7. 相手のシチュエーション・思いを引き出すための的確な質問は難しいと感じました。（事務職員・男性）
  8. 非常によい練習になった。カウンセラーはクライアントの言うことを、ゆつくりと「繰り返し、相手の気持ちを和らげている。」見習うところが多い。（教員・男性）
  9. とても、勉強になりました。ブリーフセラピーによる“六つの有効な質問”を参考に「聞く」耳を持ちたいと思います。（事務職員・女性）
  10. 自身がカウンセラーの立場に立っているときよりも、観察しているときの方がより、クライアントに何を質問すればよいかなど、考えることが出来たように思う。（事務職員・男性）
  11. ロール・プレイングをすることによって、あらためて、カウンセリングの難しさを感じました。とりえず「繰り返し」や「言い換え」に徹することを考えていたら、「例外探し」の質問にまで及ばずに終わってしまいました。そして、インスー・キムバーグ氏のDVD「子どもは私の生きがい」でのカウンセリングのすばらしさ、見事すぎるほどの質問の一つ一つ、話の間の取り方、雰囲気作り方など、心に残りましたので、このイメージを忘れずに、今後の学生の面談を行っていききたいものです。

以下に、わたしが考えたことを書きます。

1. ご指摘のとおりだと思います。注意深く「聴く」訓練をしているのです。学生の気持ちを自分が「感じる」「洞察」するということだと思います。また、（CO）は基本的に、「こうだろう」と推論しますが、そのことばを（CL）の方から出してもらうことを、待っています。そうすると、クライアントが「自分の気づき」「洞察」を進めていく中で、課題の解決が図られます。勝手によくなっていくのです。自分で解決を図ったのだと思えることが大事です。ひたすら、伴走に徹します。自分にとって一番いい解決は、相談に来た人が持っていることをひたすら信じる。これが

**カウンセラーの役目**です。辛抱が修行です。(Co:)は解決のために必要だと思われる「**情報提供**」を行います、解決を生み出すのは(CL)です。ソクラテスの「産婆術(問答法)」をやるのです。ひたすら教育的な行為です。

2. その通りです。確かに悩ましいと思います。私は、次にはどういう問いかけがいいか、必死に考えながら進めますが、理解の仕方に間違いがあるときに、それを修正してくれるのはCLです。どれだけやっても、カウンセリングは1回の真剣勝負です。もっと修練積まねばなりません。
3. カウンセリングの目標は、ご本人が希望を持って自分の課題に取り組めるように援助していくことです。一方、アドバイスは、目標のための情報を伝えることです。その情報がご本人にとって目標への糧になれば採用するし、害になるのならば採用にはないと思います。「誘導」については、COとしてではなく、何かの、担当者としての働きかけだと解釈するとそれはカウンセリングとは別物だと思いますがいかがでしょうか？
4. 1. の方のコメントからすれば、その役柄をご自分が体現していることになり、「なりきられて」いる状態といってもいいのでしょうか。もう一つは、グループの親和性が高く、リラックス出来たのかと思われます。また、カウンセリングにおける「聞く」→「聴く」とお考えになったらいいと思います。話す内容以外にも、表情、目つき、ジェスチャー等の非言語コミュニケーションも含めて「聴く」とお考えください。
5. すごいですね。解決志向アプローチの内容に踏み込まれています。今後も、ロールプレイの深化を図りたいと思います。
6. 1. の方と同じ感覚に襲われたのですね。結構なことですね。ロールプレイの深化を図りたいと思います。
7. 8. 9. 解決志向アプローチの修練は終わりがありません。学生に対してどんどん使っていきましょう。
10. 勘所が分かってきたので、観察が鋭くなれたと思われます。
11. どんどん、進歩されていることを感じます。わずか、半年(6回)の研修会で、このような感想が出てきたことに感謝いたします。

以上のような研修会の内容と学生相談や心理学に関する話題を提供してきた。全9回の定期研修会を通して、筆者が学んだことをまとめておく。

- ① 参加者が平均10名であったことは、教職員の授業が最も少ない時限と曜日を特定したが、予想外に少なく、残念であった。しかし、参加された方々は、普段の学生指導で学生相談の必要性を感じている人であることもわかった。これは、学内における人的資源を確保し、新しい力になることを示唆している。また、筆者がこれまでに学んできたベーシックな事柄をまとめる機会となった。
- ② 今後、具体的な学生支援のためのツール(学生援助シート等)を個別に使用して、学生援助シートの更新を進めていきたい。

## 5. 「リメディアル教育」について

本学の学生支援目標について、1. 1. 3 a)「学び」の問題で「自主勉強会」についてふれた。そこで、どのような流れだったのか、まとめておきたい。

はじめに、「リメディアル(remedial)教育」の意味について述べる。これは、大学教育を受けるために必要な基礎学力を補うために行われる補習教育。学力不足が著しく不足している学生を支援するために大学が実施する教育である。

移民の国であるアメリカのコミュニカレッジ(短期大学)で始められた教育である。四年制大学で学ぶための準備として必要な、読み・書き・数学といった基礎的なコースを設定している。日本では、大学の講義内容がわかる程度の学力を補充するための教育内容だと理解すればいいと思われる。初等中等教育で分数・かけ算や基礎的な漢字の習得ができていないままに、大学に入学してきた学生に少しでも、基礎学力を養成したいとの思いで取り組んでいる。この考え方は、平成22年度にFD委員会から全学的な課題として提起された。それを、学生支援センター運営委員会等で検討の結果、以下のような実施要領が作成された。



夏期リメディアル自主勉強会（国語・数学）日程・実施要領					学生支援センター運営委員会			
1 実施日時、担当者 9月12日～17日（12～14は午後のみ、17は午前のみ）								
	9月12日(月)	9月13日(火)	9月14日(水)	9月15日(木)	9月15日(木)	9月16日(金)	9月16日(金)	9月17日(土)
	午後	午後	午後	午前	午後	午前	午後	午後
ビジネス	1	1	3		2	2	2	1
情報	2	2	2	3	2	3	3	1
研究所	1	2	1	3	4			1
支援センター	2	3	1	2	2	5	2	3
合計	7	8	7	8	10	10	7	6
午前：1・2時限 午後：3・4時限 ※数字は指導にあたった教員の数を示す								
2 場所 学生支援センター（2号館2階）								
3 教材等								
日本語コミュニケーションと基礎数学Ⅰそれぞれの対象者には、下記の国語と算数の教材を用いてご指導をお願いします。その他の学生については、希望に応じて教材を選んでください。								
（1）国語								
① 天声人語								
毎回最初にこれの書き写しをさせ、時間的その他余裕があれば②の問題集をさせてください。								
② 日本語トレーニング（1）ステップ1・2								
（2）算数								
① 小学校わくわくワーク								
小学校3年生レベルの計算問題を中心に学力を確認してください。								
レベルに応じて別の学年・分野の問題を用意してあります。問題をコピーしてお使いください。								
② 2011年度基礎数学Ⅰ前期試験問題								
③ つまづき箇所の発見、学習効果のチェックなどに適宜ご活用ください。								
対象学生の2011年度基礎数学Ⅰ前期試験の採点済答案コピーも用意しています。								
（3）基礎学力講座（就職課主催）の予復習教材								
① 講座で使用した問題を用意しますのでご活用ください。								
4 勉強会実施上のお願い								
①出席表で欠席の確認を行います。参加対象学生の名簿にない学生（日本語や基礎数学Ⅰ合格学生や2年生以上）には、出席表に氏名を記入させてください。								
②学習記録表にその日の学習内容および自己評価と感想を記入させ、帰る前に回収してください。								
5 指導上のお願い								
① 一日に1コマの参加でもよいので、できるだけ毎日出席するように指導願います。								
② 問題を渡したら、学習する様子を観察の上、できるだけ声掛けをしてください。								
③ S P I試験では簡単な問題を短時間で正確に解くことが要求されますので、つまづき箇所の発見や弱点補習のほかにも、理解度に応じて簡単な問題を使い、一定時間内で正確に答える練習なども加えて学習意欲を上げるような工夫をお願いします。								
以上								

表 5-1 夏期リメディアル自主勉強会

全学をあげて、協力してもらったことで、学生の学力状況について実態を把握することができた。先生方の授業に対する工夫につながると思われる。

後期の11月から2月末まで、アドバイザーから推薦のあった学生に対して、「後期リメディアル教育の実施について」の要領で学習が始まった。何はともあれ、できることから始めることが大事である。月曜4時限目、火曜5時限目、水曜5時限目を中心に、学生支援センター運営委員が交代で指導にあたった。推薦を受けた学生は、決して、自らの意思で訪れているわけではない。しかし、このようなことを契機に、地道に努力することで少しでも内容が理解できるようになれば、次には自らの意思で取り組むことになると思える。実際、3年生が、「このままでは、就職試験が不安」ということで、センターで学習している。本学のリメディアル教育は始まったばかりである。より一層の努力を学生・教職員共にできれば、必ず結果はついてくると期待している。

## 6. 今後の課題

「1.1.3 学生支援方針への取り組み」で述べた内容は、学生相談の大きな流れを、意識した理念ではなかったが、今となってみれば、本学での「チーム支援」構築に大きく寄与している。筆者が赴任してきた当時、すでに学生に

対する教育相談体制の確立は早急な課題であったので、「学生支援指針」は、教職員に必要性を訴える大きな力になった。少しずつではあるが、着実に全学での支援態勢が整いつつある。次年度に向けて、課題となる事項について、述べることにする。

まず、3.2「学生援助シート」の有効活用について、一枚目のシートを作成して、更新することもなく、次年度を迎えている。これを何とか、教職員に呼びかけて、学生支援をもっと手厚くする必要がある。そのためには、大学全体に「チーム支援」に基づいた組織の態勢を作っていくことが有効な方法である。一日も早く、そのための叩き台を作っていくことが肝要である。

次に、5.「リメディアル教育」については、学生支援センターの教職員による呼びかけによって、軌道に乗ってきたと思われる。しかしながら、学習内容がどれほど学生にマッチした内容であるか、今後研究していかなければならない。学生支援センター運営委員は授業を行いながら、空き時間を利用して、センターに出向き対応している現状である。やはり、塾講師や中等教育学校の退職教員等をお願いして、学生指導に当たって欲しいと感じる。そのための予算措置が必要である。

#### ＜参考文献＞

1. 日本学生支援機構 2007 「大学における学生相談体制の充実方策について —『総合的な学生支援』と『専門的な学生相談』の『連携・協働』—」